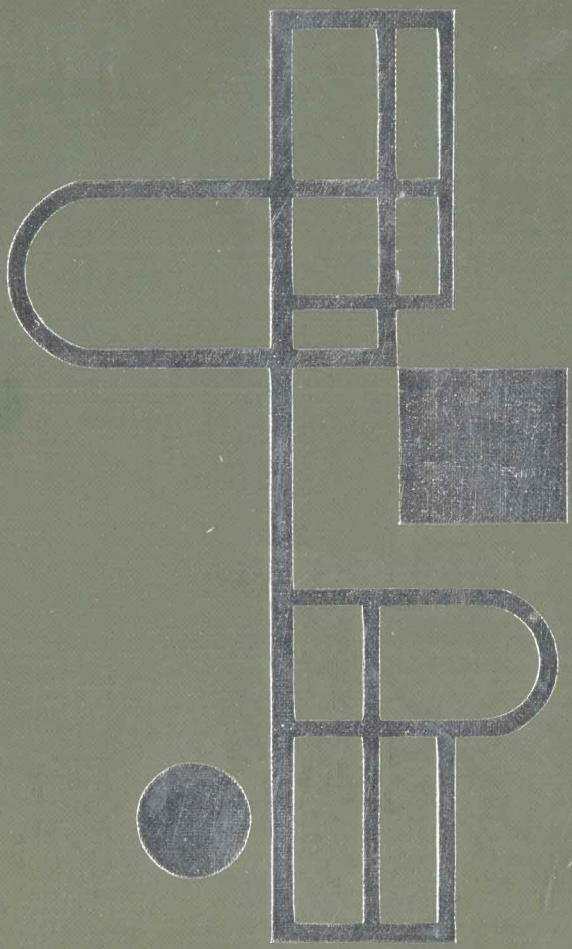
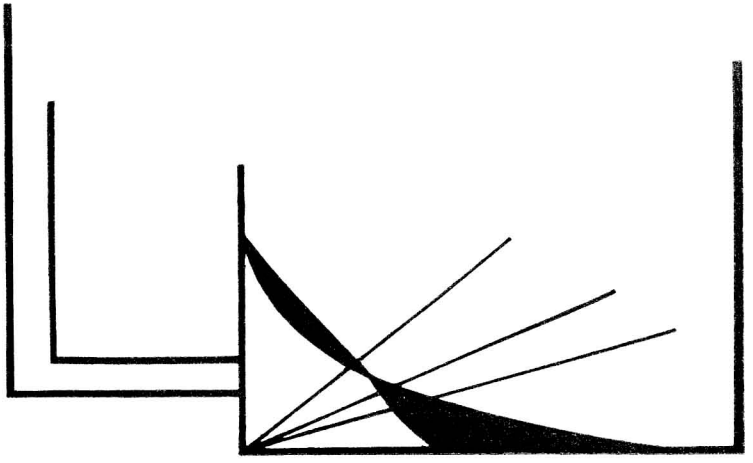


上林暁集

新選 現代日本文學全集

8



筑摩書房版

新選 現代日本文學全集 8

上林 曉集

昭和三十四年四月二十五日 発行

著者 上林(かん ばやし) 曉(あかつき)

東京都千代田区神田小川町二ノ八

発行者 古田 晁

東京都青梅市根ケ布三八五

印刷者 山田一雄

東京都千代田区神田小川町二ノ八

発行所 筑摩書房

〔電話〕東京(二九局)七六五一(代表)(29)

振替 東京 一六五七六八

整版 株式会社精興社

印刷 株式会社精興社

製本 株式会社高陽堂

上林暁集　目次

風致区……五
きやうだい夫婦……一一
嶺光書房……一七
現世図絵……二八
四国路……四一
遅桜……四八
嬬恋ひ……五五
擬宝珠庵……六九
死者の声……七五
スケッチ・ブック……八四
弔ひ鳥……九二
古風……九九
小さな蟻瀬川のほとり……一〇六
開運の願……一一六
子の消息……一二五
更年期……一三三
約束の家……一四二
草深野……一五一
禁酒宣言……一六一
真少女……一六九
零落者の群……一七七
青春自画像……一八七
鉛筆の家……一九五
姫鏡台……二〇六
緋文字……二一五
マヅルカ……二二二

入社試験……二三一
たばこ……二三八
梧桐の家……二四五
柳の葉よりも小さな町……二五四
泰作咄……二六六
村八分……二七五
大懺悔……二八四
三人姉妹……二九四
説教聴聞……三〇二
伏字……三一五
光明院の鐘の音……三二二
和日庵……三二七
桜貝……三四一
つつじを看る……三四九
過ぎゆきの歌……三五九
春の坂……三七二
絶食の季節……三七七
旧病院三題……三八五
旧病院……三八五
聖ヨハネ病院再訪……三九四
揚雲雀……四〇二
上林暁について……田宮虎彦　四一〇
解説……市原豊太　四一三

装幀　恩地孝四郎
　　恩地邦郎

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

上林暁集

吉祥寺の駅に降りると、私の足はいつとなく井ノ頭の池に向いてゐる。吉祥寺の駅に降りて、井ノ頭の池を一廻りして来ないと、なんだか気が済まない。

井ノ頭の池も、もう昔の面影はない。池を周つて、何百本と知らず蠹々と伸び揃つてゐた杉の樹は、最早跡形もなく姿を消してゐる。私は蠹々といふむづかしい文字を使つたが、あの昼も小暗い木の間闇を作り、あのじめじめとした木の下路に日影も射させないでゐた杉群を形容しようとすると、どうしても、この蠹々といふむづかしい文字を使ふよりほかに形容詞が見出せないのだ。聞けば、あの杉の木どもは、空襲で死ぬる人達の棺桶を造るために切り払はれたのだと、誠しやかに語る人があつた。私は真偽の程は知らなかつたが、風呂屋の籠が、屍体を収容するために使はれるさうだといふ流説と同じ種類のものではないかと思つて聞いた。が、尠くとも、あの木どもが、どこかの工場として建ち、何かの船舶となつて海に浮んだことは、恐らく事実であらう。そして工場として建つた幾何かの杉の木は、空襲のため倒壊焼尽し、船舶となつて海に浮んだ幾何かの杉の木は、海底深く撃ち沈められたことであらう。跡には、あの小暗い闇を作り、古寂びた池を湛へさせて、蠹々と天を摩してゐた彼等は影も形もなくなつて、その時分には想ひ見るだに出来なかつた開濶な空地が拓かれ、切られた当座は、何かの動物でも蹲つてゐるやうな恰好で転つてゐた根つ株も取払はれて、今では畑の物を作る畝が並んでゐる始末である。戦争の魔の手は、この幽邃な風致区から、闇と冷気の醸し出す夜曲的な雰囲気を取上げて白日の下に曝してしまつたのである。

私はここに来る度に、木群の厚みが薄くなり、生ま生ましい木口を露はした木材が積み重ねられ、遂には杉の木といふ杉の木が姿を消し、打ち拓かれて畑地が出来るのを見て、何とも言へぬ口惜しさを感じてならなかつた。何百年の間にわたつて、あの木どもを守り育てて来た古人の心も、一朝にして蹂みにじられたやうな憤りさへ湧くのであつた。山河は美はしく、人の心は和み、善き政治が行はれてこそ、我々のうちに国を愛する心も保たれるのであるが、山河が荒れ、都会が灰燼と帰して、何の愛国心ぞやと悲しまざるを得なかつた。果して戦争が終りに近づくとともに、人々から愛国心が喪亡して行つたのも、止むを得ぬ事情であつた。

それにも拘らず、吉祥寺の駅に降りることがあると、私の足は自づと池の畔に向くのであつた。池の周りを一わたり歩いて来ないと、気が済まないのだ。貨物自動車が埃を捲いて走る往還を外れて、一歩園内に入ると、私の心はひんやりとした池の霊気に融けて和むのであつた。黄色な落葉が林の中に散り敷いてゐるのを、靴先で蹴散らしながら歩み込んだこともあつた。往還の埃を鎮めるやうに小雨の降りかかる中に、紅や白の梅の花が綻び初めてゐるのを眺めながら、池の方へ降りたこともあつた。

私が井ノ頭を訪れるのは、何かの所用を果した後なので、大抵は夕方近く、暮れるに間もない時分である。戦争になつてから井ノ頭なんか歩く人は稀であつたが、殊にその時刻には、ただ私のやうに紛れ込んだ閑人だけが時折池の畔をさまよつてゐるきりであつた。折悪しく、近くの工場から急がしく帰つて来る男女工員の群に出会はすこともあるが、彼等が通り過ぎてしまふと、あとは却て静けさを増し、池に浮ぶ白鳥や鴛鳥の声が高まるのであつた。或る休日の夕方歩いてゐると、一人の若い工員らしい男が、橋の上に立つて、鯉を眺めてゐた。何と所在無ささうな姿なんだらうと、私自身も人生の倦怠を感ずるやうな嫌やな気持になりながらその男に近づくと、橋の下には、白や緋や黒や斑らの大きな鯉の一団が、その男の投げるパン屑を争ひながらのた打つて、弓張提灯のやうに口を開いたり、鯉が鯉の上にせり上げられて、背を水面から露出したりしてゐた。それを見ると、私も忽ち惹き寄せられ、その男が決して所在無い

気持ではなく、最も愉しく心を游ばせてゐるのだと感づくのであつた。或る夕方には、一人の若い男が、連れの女をベンチの上に坐らせ、自分はその側に立つて、オカリナを吹いて聴かせてゐた。私はそんな情景を目にすると、見て見ぬ振りをして通り過ぎることにしてゐる。

田端君が亡くなつてから三年になる。私は井ノ頭へ行く度に、田端君のことを思ひ出す。生前私は田端君と親しく往来した間柄ではなかつた。言はば、普通の文学友達以上のものではなかつた。田端君は時折私の家を訪ねて呉れたことがあつたが、私の方では田端君が死ぬるまで君の家を見る機会がなかつた。田端君が東北の市で客死したといふ新聞記事を見て、その晩訪ねて行つたが到頭尋ね当らず、翌る晩になつて初めて君の家の門を潜つたといふやうな塩梅であつた。それでゐて、井ノ頭に行く度に、田端君がこの近くに住んでゐたのに、今はもう居なくなつたと思ひ、懐しく、寂しい気持がしないことはない。そして田端君の随筆の中に、夏の朝早く、子供を連れて井ノ頭のプールへ泳ぎにゆくことが書かれてあつたのを思ひ出したり、また或る作品の中に、まだ作家として世に出ない頃の田端君が、仕様事ないままに、毎日出掛けては腰を下ろしたと書かれてゐる木陰の木椅子といふのは、どの辺にあるのだらうかと思ひ運らしたりするのであつた。

戦時中も、私は屢々、同時代の作家としての田端君のことを思ひ出した。それも、空襲に脅かされて明日をも知れぬ自分の命を思ひ、或はのしかかる戦争の重圧に堪へ難い思ひがする時、極まつて田端君のことを想ひ起すのであつた。そんな訳だから、私が田端君のことを思ひ出すと言へば、いつもこんな苦しい思ひを経験せずに、自然な死を恵まれた田端君の身の上を羨み、生きてゐる自分よりも、死んだ田端君の方が幸福だつたと思ひ較べてゐるのだつた。さりとて、この苦しみから脱れられないものなら、自ら死を撰ぶよりほかはないのだが、それが出来ず、自然の死も恵まれないとすれば、この苦しみはいつまでつづくことかと煩ひ惑ふにつけ、田端君は好い時に死んだものだと思ふのであつた。我々は、ヴァジニヤ・ウルフになつてはいけないと、遠い田舎から手紙を寄越した友人のことを思ひ出すこともあつた。英国の女流作家ヴァジニヤ・ウルフは戦争中身を投げて死んだのだ。

今は違ふ。今は、私は生き延びた自分を幸福に思ひ、田端君も今まで生きてゐてくれたらと残念に思ふ。数日前、終戦後初めて井ノ頭へ行つた時にも、田端君の面影が目先にちらついて仕方がなかつた。未亡人を初め、遺族の人達も元の家には居らぬさうだが、どこに疎開してゐることだらうかと考へた。難関を突破して海軍の学校に入つた息子さんは、今はどうしてゐるだらうかとも考へた。みんな元の家に居られるなら、どうせ田端君に会へる望みはないにしても、一度訪ねて行つて、田端君を偲ぶよすがとしたいものだが、それさへももう出来なくなつたのかと思ふと、田端君を懐しむ思ひは愈々募るばかりであつた。

田端君の家を初めて訪ねた晩は、暗い夜であつた。未亡人は遺骨を迎へに行つてゐて、女学校の上級生と思はれる娘さんが一人、家を守つてゐた。娘さんは、端正な物腰で応対した。「寂しいでせうが、しつかりして下さいね。」と言ひ残して、私は立ち去つた。

田端君の家を出ると、私は夜の井ノ頭で涼が納れたくなつて、まつ暗な公園の中に紛れ込んで行つた。蒸し暑い夜で、公園の中にも少しも風がなかつた。それに、杉林の中は意想外に暗かつた。夜の闇と杉の樹の見境が全然つかなかつた。その頃は、杉の樹もまだ健在であつた。私は杉の樹と杉の樹の間を手探りで歩き、手を延ばしては杉の樹の幹に摑まりながら歩を移した。それでも、思ひがけぬ鼻先に杉の樹に出会はして、額を嫌やといふほど打ちつけたりせねばならなかつた。おまけに、前日までの驟雨が上つたばかりだつたので、地面はじくじくとぬかるみ、水は処構はず木の間を縫うて流れを作つてゐた。それだのに、真の闇で、どこを踏んでいいのか、足許は皆くれ見えなかつた。初め出鱈目に歩いてゐた私は、しまひには無茶苦茶に歩かねばならなかつた。脚や裾が汚れるのは愚か、ぬかるみや水の流れに踏み込んだ下駄を引き抜くのにさへ難渋する有様であつた。もはや呑気な涼み歩きだなどと言つてはゐられなかつた。私は真剣な顔になつてゐた。何の因果で、

こんな暗い晩に、こんな所へ迷ひ込んで来たのかと後悔しながら、裾からげになつて、漸く中の橋に辿りついた時、私は本当に一生懸命な気持になつてゐた。

夜の井ノ頭を歩くのは、二度目であつた。数年前、池の近くの松林の中に新居を構へた或る夫人に、友人達と一緒に招かれて、一夕御馳走になつたことがあつた。その夫人は、つつましい短篇や小品を書かれる人であつたが、その家の部屋々々は、二枚つづきの大襖で仕切られ、暖炉には薪を焚いて、骨つきの鶏の肉など出される御馳走であつた。その家を出た時は、もう夜が更けてゐて、池の周りの林は闇に包まれてしんと静まり返つてゐた。道もどこをどう通つていいか判らないので、先に立つた者が懐中電燈を点けて、その光を頼りに従いて行つた。懐中電燈の光は、右左、後先から囲んで来る杉の幹に遮られねばならぬので、十分足許を明かすには足りなかつた。中の島の動物園の前を通ると、動物の毛の臭ひがぷんと鼻を衝いた。橋を渡つて行くと、池の縁に点いた標識燈の光が水に長く映つて、蠟燭を逆さに立てたやうに見えた。――それ以来、二度目の夜の井ノ頭だつた。

田端君の告別式のあつたのは八月に入つて、暑い日中であつた。私は焼香を済ませると、伊勢君を誘つて、二人で井ノ頭へ足を伸ばした。橋を渡つて、杉の木の蔭のベンチに腰を下ろして休んだ。折柄、子供を連れた竹本さんが、白い洋服を着て通りかかつた。竹本さんも、田端君の告別式に来たのであつた。竹本さんは、或る文芸雑誌の婦人記者をしてゐて、私の家にも度々訪ねて来たことがあつた。その時分はまだ独り身で、私の家の子供達が、脇の裂けたやうな洋服しか着るものがないのを見兼ねたらしく、死んだ妹の片見に大切に蔵つてゐたといふ臙脂色の子供服を持つて来て、私の子供に着せてくれたことがあつた。それ以来、うちの子供は「竹本さんから貰つた洋服」などと喜んで、一張羅のよそゆきに着たものであつた。

「休んでいらつしやいませんか。」と言ひながら、私達はベンチの端を空けた。

「ええ、でも、坊やが言ふことを聞きませんから。……これ、そこらで買つて来ましたからお頒けしませう。」

さう言つて、竹本さんは手提袋の中から赤いトマトを取り出し、二つづつ私達の掌に置いて行つた。子供を重さうに抱へた竹本さんは、暑さに額の汗を拭き拭きしてゐた。子供は顔にいつぱいあせもが出て、天瓜粉を白く塗つてゐた。

「竹本さんも、すつかり変りましたね。」と後を見送りながら伊勢君が言つた。

「家庭的になりましたね。」と私は答へた。「文化女学院時代は舞踊がうまかつたさうだし、記者になつてからは煙草なんか吹かしてゐた人とは思へませんね。」

さう言つてゐるところへ、今度はまた、引田君が通りかかつた。引田君も、田端君の告別式の帰りであつた。引田君は田端君の出た大学の予科の教授で、小説も書く人である。

「田端君が死んで、山渦さんが弱つてるさうだ、俺が死んだら、田端君に葬儀委員長になつてもらふつもりだつたのに、葬儀委員長になつてもらふ人がなくなつたつてね。」引田君はベンチの端に腰を下しながら言つた。

「逆になりましたね。山渦さんが田端君の葬儀委員長にならなくちやならないなんて。」と伊勢君が言つた。

「兎に角、葬儀委員長は別としても、田端君が死んで、山渦さんはこたへてゐるさうですね。」

「それはさうでせう。山渦さんの家へ出入りする人のうちでは、田端君の才能を一番買つてゐたし、頼りにもしてゐたやうですからね。」と私は言つた。

「田端君の後で、山渦さんの葬儀委員長になるのは誰かね。」

「岡崎勝太郎君はどうだらう。」と私が言つた。

「岡崎君が、山渦さんとの関係では、一番古い人でせうね、そいつは面白いかも知れないね。」

引田君は如何にもおつとりした人柄で、こくのある話口で一頻り田端君の思ひ出や、世間のことや、独軍がスターリングラードの囲みを解いて以来の欧洲戦争のことなど語つて、私達を賑ははせた後、さてと腰を上げると、重態で床に就いてゐるといふ或る先輩を見舞ふため、竹本さんが行つたとは反対の方角に、杉林の中を歩いて行つた。

私が帰りがけに、子供のために、楽焼などの

土産物を売つてゐる店で、小芥子人形を買つて帰つたのは、その日のことであつた。今年になつてからは、この春行つてから、先日まで行かれなかつた。春行つた時は、四月中旬の空襲の翌る日で、神奈川県下の陸軍軍医学校へ入校するため帝都電鉄で迂廻して行く義弟を見送つて来て、吉祥寺の駅で別れた足で、井ノ頭に向つたのであつた。池の縁に沿つて切り残された桜の木が、片輪木のやうに池の面に向つてのみ枝垂れて、満開をやや過ぎた花が散つてゐた。私は暫く立ち停つて花を眺めた。井ノ頭の桜と言へば、翠に映発してゐるところしか知らなかつたので、日向に真つ裸にされて咲いてゐるのを見ると、どこかよその遊園地にでも来てゐるやうで、場違ひの感じだつた。ただ池の向かうの吉野桜は、こちら側の山桜の淡紅い花群に対し、黄白い花を一杯つけて、翠に囲まれてゐた。

ボオトは一艘も浮んでゐなかつた。しかし、井ノ頭に来てボオトのことを思ふ度に、私の頭に浮ぶ一つの情景が、その時もまた私の頭に浮んだ。もう数年前、まだボオト屋には、切符を買ふ若い男女が列を作り、漕ぎ廻るボオトは池を被ふかとばかり入り乱れてゐた時分のことであつた。岸近く漕ぎ寄せて来た一艘のボオトを見ると、一人の若い細君が毛糸を編みながらボオトに乗つてゐた。折角井ノ頭へ来てボオトに乗りながら、ボオトに乗つてまで毛糸を編む細君と遊ぶんでは、櫂を漕ぐ男も何んの面白いこともないだらうと思つて、ひとの細君のことながら、私は忿懣のやうな気持に堪へなかつた。それがいつまでも忘れられないのである。ほかの人達は、櫂を操る男も乗せられてゐる女も、或ひはその反対でゐる男も女も、池の周りの景色を眺め、水の上の快い蕩漾を味ひながら、殆ど夢見心地のやうな状態で、嬉々として、ボオトを乗り廻してゐるのに、そのボオトでは櫂を操る男の心も知らなげに、細君は一生懸命に毛糸を編んでゐるのである。彼女はあたりの景色を眺めるでもなく、夫に話しかけるでもない。眼は毛糸の玉と指の先に落ちて、一心不乱である。手先は器用に、目まぐるしく動いてゐる。手先が器用であればあるほど、私の忿懣は募つた。私は夫の立場に身を置いて、その男に同情した。しかし男は詰まらなく思つてか思はずでか、毛糸を編む細君を乗せたまま、ボオトの蝟集した池心に向つて漕ぎ返つて行つた。

この小さな情景が、かくまでも鮮かに、かくまでも忘れ難く、私の心に残つたといふのは、実は私は、自分自身の姿をその細君に見出したやうな気がしたからであつた。細君に向けた私の忿懣は取りも直さず、私自身に向けた忿懣なのであつた。私は自分の家庭生活を省みて、若し私が女に生れてゐたなら、私はきつと舟の中まで毛糸と編棒を持ち込んだにちがひない。全く世の中には自分の仕事のことだけに構つてゐて、面白くも可笑しくもない人間があるものだが、私もその一人であるし、その女もその一人なのだ。だからその女が、ボオトの中で毛糸を編んでゐるのを見ると、自分自身を鏡で見るやうな嫌やな気持がして、忿懣をぶちつけたくなるのだつた。さうしてこの小さな情景が、井ノ頭へ来る度に、いつまでも私の心から忘れ難くなつて行つたのである。

先日は、三鷹へ行つた帰りだつた。私は池の端へ来ると、プールの下にあるセメントのベンチに腰を下ろした。傍らに欅の木が立つてゐて、池の側に垂れ下つた枝が、色づいた葉をつけて、頭の上にかぶさつてゐた。池の縁の樹木は、桜にしても欅にしても、みんな杉の樹の精に押されて、枝といふ枝を池の上にしなだれさせ、それが杉の樹の無くなつた現在別種の風致を形作つてゐるのだつた。私はポケットから「若いヱルテルの悩み」を取出し、ペエジを繰る前に、先づ一服と思つて、煙管と自家製の巻煙草を上ん前のポケットにまさぐつた。アメリカの兵隊が二人、三四人の若い女達と連れ立つて、英語を喋舌りながら通つて行つた。林の入口には、一台のトラックが停つてゐて、国民学校の女の子達が、アメリカの兵隊を取り囲んでゐた。そのうちの一人は、したり顔に助手台に上つて、アメリカの兵隊と並んで腰を掛けてゐた。私は煙草を吹かした。私の投げた燐寸は、欅の葉の上に落ちて、その落葉を燃やしながら、それ自身も金の象嵌のやうに燃え尽きて、消えて行つた。

私は本を開くのも重い心で、暫くぼんやり坐つてゐた。井ノ頭弁天の扉が開いて、鉦を鳴ら

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

しながら、晩の祝詞を奏する声が聞えてゐたが、今はまた、後の岡の上にある寺で撞き出す鐘の音が、林の中に籠りながら響いて来た。私は、或る精神病院に入院してゐる妻を、別の病院へ移さねばならなくなつたので、奔走に疲れ、そのために心が重いのだつた。その日も、三鷹にある精神病院を検分に行つてゐたのである。これで、病院を変ること三度目にならうとしてゐる。最初の病院には七年居た。今の病院に移つてからは、まだ一月半にしかならないのだが、工合が悪くなつたので、逐ひ立てられるやうにして、別の病院へ移らねばならぬのだつた。これからもまだ、都合によつては、異常なる病院から異常なる病院へと幾度病院巡礼を繰り返さなくてはならぬ妻の運命か知れなかつた。それを思ふと痛ましかつたが、しかし私は最早長い経験で、この異常なる病院を異常とも思はぬまでに無神経になつてゐた。最初からでは、松沢病院を初めとして、かなり多くのさういふ病院に当つて来てゐるので、「実は家内が少し病気でして」と、病院の受附へ行つては相談を持ちかけるのも、もう平気な気持になつてゐた。そんな風に、異常なる病院を異常とも思はぬまでに無神経になつた私の心も、痛ましいと言へば言へるかも知れなかつた。三鷹の病院へ行つても私は受附の窓口へ行つて、事務員の男とこんな風な事務的な会話を交はしたのだつた。

「実は家内が少し病気でして。」

「いつからお悪いですか。」

「もう七年になります。」

「今どこかの病院に居られるんですか。」

「最初は、武蔵野養生院に居て、一月許り前に、その近所の小桜病院に移つたばかりでしたが、長い病気で大分衰弱してゐるから、附添ひに来てくれといふので、僕が一週間許り寝泊りで詰めてゐたんですが、からだがこたへて続かなくなつたし、附添ひを雇はうにも人は無し、それでこちらの病院でお世話になりたいと思ひまして。」

「ああ、さうですか。一度お連れして、診察をした上でなくては、何ともお決めするわけには参りませんですが。」

「それでは、連れて来て、診察をしてみて、都合が悪るかつたら、また連れて帰らねばならないんですね。」

「ええ、さうです。」

「それだと一寸困るんだが、……こちらさんには、リヤカアとか人力車とか、移送の設備はないでせうか。」

「それが無いんです。」

「専任の附添ひは居られますね。」

「ええ、それは居ます。」

「室は空いてゐますね。」

「ええ、空いてゐます。」

「一人づつの室でせうか、それとも雑居の室でせうか。」

「こちらには雑居の室はありません。みんな一人づつの部屋になつてゐます。」

「失礼ですが、入院費はいくら位でせうか。」

「最低八円です。それから、十円、十五円となつてゐます。御存じの通り配給だけではとても賄つてゆけませんから。」

「ああ、さうですか。どうも御面倒かけました。何れ、身内の者とも相談しまして、御厄介になるやうでしたら、また改めて参りますから。」

もう平気になつてゐるとは言ひながら、栗の落葉を踏んで病院の門を出る時には、私の心は重くなつてゐた。平気で交したと思つた会話のうちに、私の心を悩ます事実が、総べて含まれてゐるのだつた。例へば、最低八円として、一ケ月では二百四十円になる。入院費だけでも、今まで割安の病院に妻を置いて来た私にとつては、面前に立ち塞がるやうな事実であつた。そして、それなくしては、方々の病院で、バタバタと病人が斃れてゐるといふ事実、――大きな病院では毎月五十人からの病人が死んでゐると言はれる事実から、脱がれさせるわけにゆかないのだつた。それだけ払つても、果してその事実から脱がれ得るものかどうか、それも解らないのであつた。

その心の悩みのままに、私は三鷹から井ノ頭まで歩いて来たのだつた。私はベンチに腰を下ろすと、死んだ田端君のことをまた思ひ出して、「僕はまだ、こんなことに追はれてるんだよ。」と、話しかけたい心内の衝動を感ずるのだつた。

私が妻の病気に追はれ始めたのは、田端君が死ぬるずつとずつと前からのことなのだ。それ

を思ふと、私は心の焦ら立ちを感じながら、やけつぱちになつて、「いつそ、妻が早く死んでくれて、こんな悩みから救はれたら、どんなにせいせいすることだらう。」と、妻には済まないことと思ひながら、そんな不埒な考へに捉はれるのだつた。

「いけない、いけない、こんな非情なことを考へては妻が可哀さうだ。」と私は自分の不埒な考へを振りもぎるやうに頭を振つて、手に持つた「エルテル」を開いた。もうあたりは暗みがかつて、私の視力では、一ページか二ページしか読む当てはなかつたが、私は眼を瞠いて、ページの上に、視力を凝した。

「僕の魂の前の幕のやうな物が引き除かれて、無限の生命の舞台は僕の前には永遠に開いてゐる墓の深淵と変つてしまつた。君にはこれはあると云ふことが出来るか。万事が過ぎ去るのに。万事が電光石火の迅さで転げて行つてその存在の全力を持続することは非常に稀なのに。ああ、流の中に引込まれ、押し沈められ、岩で砕かれるのに。君と君を繞る君の家族を食ひ尽さない瞬間とてはなく、君が破壊者でない、破壊者であつてはならない瞬間とてはないのに。極めて無邪気な散歩も数千の憐れな虫けらの生命を価するのだ。一歩足を踏めば、蟻が労役惨澹した建物を崩し、小さい世界を情ない墓に踏み付けてしまふ。ああ君等の村落を洗ひ去る洪水、君等の都市を鵜呑みにする地震等の、世界稀有の大厄災が僕を感動させてゐるのではない。自然の万物の中に隠れてゐる蚕食力が、僕の心を振り覆へすのだ。自然はその隣接者と、自分自身とを破壊しない物は一つも作らなかつた。斯うして僕は心配になつて蹌踉いてゐる。天と地と、僕を繞る天地の活動する諸力よ。永遠に呑み込み、永遠に反嚼する怪物以外の物は何一つ僕には見えない。」

私はやつとその一節だけを読むことが出来た。偶然にも、恐ろしいことが書いてある文章なので、私の心を圧して来た。私は二度読み返して、ベンチを立ち上つた。

かいつぶりかと思はれる水鳥の啼く声が、どのあたりかで、時折笛を吹くやうに聞えてゐた。

（昭和二十一年一月）

きやうだい夫婦

先月の末に、妹の仙子が上京して来たので、戦時中からつづいた私のやもめ暮しも終りを告げた。そしてまた、以前の通りに、きやうだい夫婦のやうな生活が始まつた。

私の妻は、もう数年にわたつてサナトリウムに行つたきりなので、その間、仙子が東京に出て来て、私の身の周りを見たり、子供達の世話をしてくれたりしてゐたのである。知らぬ人は妹を見て「奥さん」と呼んで、私達を苦笑させることがあつた。家主でさへ、代替りして事情を知らないので、妹のことを「御家内」などと言つて、私に話しかける始末であつた。

私のやもめ暮しは、三月の下旬からであつた。妹が、長女の和子（女学校一年生）を連れて郷里へ疎開して行つたのは、三月十日の大空襲の後間もなくで、それ以来のやもめ暮しだつた。その頃は、夜となく昼となく、難民のやうな疎開者達が、自転車やリヤカアや荷車などに家財を積んで、家の前の道を打ちつづいてゐた時分であつた。さうした疎開者の群は、高崎、宇都宮あたりまで、絡繹としてつづいてゐるといふ噂であつた。停車場には、疎開者の荷物が山と積まれ、血走つた眼や憔悴した顔の人たちが犇めき合つてゐた。私の家の近所でも、道を隔てた一郭が数日のうちに強制疎開になるらしいといふ流言が飛んで、そこに家屋敷を持つてゐる人達は動揺して、狼狽の極に達してゐたものである。

「兄さんも、私達と一緒に帰らない？」

疎開の手続に走り廻つたり、荷造りに転手古舞ひをしたりしながら、仙子は度々私の気を引いた。

「お父さんも一緒に帰るといいわ。」と和子も口を添へるのであつた。

「うん、僕も帰りたいには帰りたいんだが、徳子を病院においたまま帰るわけにもゆかないからねえ、まア考へとかう。」

さう言つて、私は暫くどちらとも決めずに引つ張つてゐたが、最後にどちらかに態度を決めねばならぬ期に及んで、私は言つた。

「僕は東京に居ることにするから、あんた達だけ帰れ。」

「さうお。」と妹は悲しさうに答へた。「嫂さんは病院によく頼んでおいてはどう？　戦争が済めば直ぐ帰つて来ることにして。」

「その間に徳子に万一のことがあつては困るし、病院に寝たままの者を置いてけぼりにして帰るのも、徳子が可哀さうだから。」

「でも兄さんが、若しも空襲に遭つたら、それこそ嫂さんだつて困るし、和子ちやん達も途方に暮れることになりやしない？」

「その時はその時で仕方がないさ。徳子と刺し違へるつもりで、兎に角僕は東京に残ることにするよ。」と私は言ひ切つた。

「なんだか、兄さん一人だけ残して帰るのは、気の毒なやうな気がするわ。」と仙子は伏眼に言つて、それから和子の方へ眼を逸らすやうに上げながら、「ねえ、和子ちやん。」と同意を求めるのだつた。

「お父さんが、毎晩一人でここ（茶の間）に坐つてるかと思ふと、可哀さうね。」と和子は言つた。

「空襲さへなければねえ、私達だつて帰りたくはないんだけど。」と仙子は、後に心が惹かれるやうに言つた。

「うちの方だつて、海岸のことだから、いつ敵前上陸があるか知れたものではないさ。東京の方が安全かも知れないよ。」と言つて私は笑つた。

「それはさうだけど、同じ死ぬなら、親きやうだいと一緒に死にたいわ。」

「僕は去年の秋に会つたきりで、親きやうだいにも、健夫（長男）や光子（二女）にももう会へないかも知れないが、あんたはもう四年越しうちに帰らないんだから、僕のことは心配せずに帰るといいよ。」

「兄さん一人残して、わたし達だけ帰つたつて、ひとに何か言はれさうな気がするんだけど。」

「構はないさ。みんな、亭主を東京に残して、

細君や子供達だけ疎開してるではないか。」

さう言つてやると、仙子も憂ひの解けたやうな顔をして、疎開支度に本腰を入れるのだつた。

東京を立つ朝には、私は二人を東京駅まで送つて行つて、プラットフォームで別れた。

「それぢやア、途中で空襲に会はないとも限らないから、二人とも気を附けてね。」

「うちに言伝はないの。」

「別にないが、僕も元気でやつてゐると、みんなによろしく言つてくれ。」

「お父さん、左様なら。」

「左様なら。」

それ以来、いつになつたら再び会はうことがあらうとも予期しないで戦争が済むまで過した。

仙子は単身上京して来た。子供達は、もう少し世の中が安定するまで故郷に置くことになつたのである。仙子が帰つて来て、茶飯台の上にひろげた故郷の食べ物を貪り食つてゐる私を見て、最初に言つたことはかうであつた。

「兄さんの手の黒くなつたこと！」

「うん、朝晩煮焚きするんでね、黒く染んぢやつたよ。風呂に行つてこすつたくらゐでは、なかなか落ちないんだ。落ちてゐても、直ぐ黒くなるんだ。この間もね、結婚の披露式に呼ばれて行つて御馳走になつたんだが、こんな手だろ、盃を受けたり御馳走を食べたりするのに気が引けて困つたよ。おまけに、前にあるのが白いテエブル・クロースと来てゐるから、余計目立つんだ」

黒い手は、九ヶ月に及ぶ私のやもめ暮しの象徴であつた。そのうへ、指の先は胼胝のやうに堅くなり、爪の根元はささくれ立つてゐた。掌をこすり合せたり、手の甲をさすつたりすると、カサカサとひからびた音を立てた。同時に鱗のやうな垢が剝落した。

「でも案外元気さうね。うちでは、どんなにかこたへてゐるだらうと心配してたんだけど。」

「この頃、少し元気になつたところなんだ。今斃れては浮ばれないと思つたものだから、少し無駄遣ひをして、闇市場を食ひ漁つたんでね。ほんのこの間まで、栄養失調で、顔は蒼ん膨れになるし、尻べたは年寄みたいに皺を摑むし、心細いつたらなかつたよ。お医者に通つてヴィタミンBの注射をしてもらつて、やつとこれまでに恢復したんだ。まだ少し顔がむくんでるんだろ。若しあのままで参つたら、餓死と言ふものだつたらうね。」

「餓死なんて、ひとごとではないわね。」

「ひとごとなもんか。夏の頃は、もつとひどかつたよ。丁度終戦間際の時分だつたがね、耳鳴りはするし、手足は矢鱈に引き釣るし、椅子に腰かけると、椅子に触れた部分が痛んで椅子に腰かけて居られないんだ。それに変な話だけれど、肛門に締りがなくなつて、小便をしようとすると直ぐ便を催しさうになつて困つたよ。」

それを聞くと仙子は、田舎から出て来た人らしく、開けひろげた高笑ひをして、茶飯台の上に笑ひ崩れた。

「いや、笑ひ事ぢやアなかつたよ。」と言つて私も笑つた。

「うちではみんな、お芋でも何んでも食べ放題食べてゐるのにね。和子ちやんなんかも、随分大きく肥つてるわ。」

「さうか。僕も時々考へたよ、うちではみんな、食足らずなんて夢にも知らずに暮らしてゐるのに、同じ家族でありながら、僕だけ一人、東京に残つたばかりに餓ゑ死んだとしたら、可笑しなことになると思つてね。」

「でも、戦災に罹らなくてよかつたわね。」

「ああ、それだけは運が好かつた。屋根の上に焼夷弾の破片が落ちて、この間まで雨漏りがしてゐて、玄関の畳なんか腐れちやつたけれど、まアそれだけで済んだんだから、運が好かつたよ。」

「わたし達が帰つた頃は、深刻でしたわね。」

「あの頃は全く深刻だつたね。一日一日が、お先まつ暗だつたからね。」

「東京空襲の放送がある度に、うちではみんな心配してたわ。」

「さうだらうなア。僕は毎朝新聞を見る度に、四国の西南端といふ文字が気になつて仕方がなかつた。」

「こんなに早く兄さんに会へようとは思はなかつたわ。」

「さうだなア。お互に無事に会へてよかつたねえ。尤も僕は、自分の境遇として、戦争の有る無しに拘らず、半永久的に自炊生活をつづけね

ばならぬものと肚を決めて、あんたにももう二度と東京に来てもらはうとは思つてゐなかつたが、手紙で言つて遣つた通り、徳子が最後の宣告に近いものを下されるし、僕は僕で、看取りのため病院に寝泊りしてゐるうちに、すつかりからだが参つちやつて、このままでは共斃れになりさうな危険になつたものだから、止むを得ず、こんなに早くあんたに来てもらふことになつたんだ。それでまア、今度は、来年の春まで、冬を越す間だけのつもりで、こちらに居てくれ。」

「わたしはいつまで居たつていいんだけど……。嫂さんはその後どんな様子なの。」

「うん、この頃少し持ち直したやうだよ。一時はね、やつぱり栄養障害でね、顔や脚などにむくみが来て、危かつたんだよ。」

「一人で、何もかにもせねばならなかつたから、随分やきもきしたことでせうね。」

「うん、一頃は、もうどうにもならなくなりさうだつたから、最後の処置として、あんたに来てもらふことにしたんだ。葬式のことまで考へてゐたからね。」

私は今日まで、一身上の苦境と闘ひながら、文学に没頭し、三人の子供達を育てることが出来たのは、妹のお蔭である。私はそれを感謝してゐる。若し妹がなかつたなら、私の運命はどうなつてゐたか知れたものではない。妹は明くれば二十七歳である。二十の夏から二十六の春まで七年の間、婚期をよそに、兄である私のために犠牲となり、献身してくれたのである。それを思へば、私はもうこれ以上、妹に犠牲を強ふるに忍びないのであつた。疎開で別れるのを機会に、私が半永久的に自炊生活をしようと肚を決めたのも、実はそのためであつたのだが、事情止むを得ぬこととは言ひながら、再び妹に犠牲を強ふることとなつたのである。妹の晴れやかな顔を見ると、私は嬉しくないわけではなかつたが、それよりも心苦しさの募るのを如何ともすることが出来なかつた。私の言葉は、妹に対して、自然に気を置くやうになるのだつた。

暫く田舎に居る間に、仙子の顔が見違へるやうに明るくなつてゐたのは、事実であつた。妹は田舎のことを話しながら、その顔からは笑ひの影が絶えなかつた。過ぐる東京の生活は、妹の顔を暗くする一方であつた。見るもの聞くもの、日に日に心を重くするもの刺々させるものだらけになつてゆく世相が、妹に反映しただけではなかつた。七年にわたる兄との生活が、如何に妹の心を歪め、妹の心を痛めつけてゐたかを、私は看取しないわけにゆかなかつた。妹は、訳もないことで、私から怒鳴られた。意地悪く責めつけられることもあつた。時には、二人で角突き合せたやうに、黙りこくつて向ひ合つてゐることもあつた。妹の東京の生活は、言はば心内の闘ひであつた。その闘ひを絶えず心の中で繰り返しながら、妹は七年の間堪へて来たのであつた。

仕事と言へば、来る日も来る日も炊事することと洗濯することと配給を受けることと、それを机に齧りついたきりの兄の傍らで果すだけの生活であつた。面白いこと楽しいことは、殆ど妹を見舞はなかつた。映画にも芝居にも、自ら進んで行く妹ではなかつた。それをまた、私は連れて行つたことは殆どなかつた。仕舞ひには、倦み果てた心を辛じて引き摺つてゐる有様であつた。

昨年の四月のことであつた。女子青年団に入つてゐる妹のところへ、区役所から、挺身隊の召集状が配られて来た。それは二度目の呼出しであつた。最初の時は、妹は家事担当者といふことで、挺身隊を免かれることが出来た。今度の場合も家事担当者と言へば、当然免かれることが出来るはずであつたが、妹は進んで挺身隊に行つてみたいと言ひ出したのである。

「わたし、挺身隊に行つて、工場で働いてみたいわ。」

「さうしたら、僕達が忽ち困るぢやないか。」と私は高飛車に言つた。

「でも、うちで仕事をしてゐても、詰らないんだもの。それより工場に行つて働けば、国家のためにもなるし、力一杯の仕事が出来さうな気がするわ。」

妹の言葉は、家事担当者などといふ役目には、もう飽き飽きしてゐるらしい口振りであつた。そして、その反面に、生活の血路を開かうと悶えてゐる妹の気持も、判りすぎるほど私には判るのであつたが、妹が居なくなつた自分の生活

を考へると、私は目先が昏くなつて、どうしていいか方法もつかないのであつた。そこで私は脅かすやうに言つた。

「工場の仕事なんて骨が折れるんだぞ。」

「少々骨が折れたつて、うちで芋掘りや稲刈りなんかしてたんだから、ハンマアを振るくらゐ出来ると思ふわ。」

「それに、工場なんて危険だぞ。あんたの友達も、どこかの工場へ勤労奉仕に行つて、右腕を一本失つたさうぢやないか。」

「第一線の兵隊さんのことを思へば少々ぐらゐ危険なことは仕方がないわ。わたし、国家のために働きたいんですもの。」

「国家のためと言やア、僕も返す言葉はないが、家事担当者と申出れば国家から公然と許されることなんだからね。挺身隊や勤労報国隊を免れたいばつかりに、古い幼稚園の媒姆の免状を持ち出したり、軍関係の役所へ俄か勤めに行つたりする娘なんかに比べれば、よつぽど正当なんだ。そして、家事を担当することだつて、立派に国家のために尽すことなんだからね。」

その頃には、仙子はもうシクシク泣いてゐた。私は如何にもして妹の意図を阻止したい一心で、おつかぶせるやうに語を継いだ。

「あんたが東京に出て来たのは、僕達の生活を助けてくれるためだつたんだから、あんたが、どうしても僕達の生活を助けることが嫌やになつて、工場へ行きたいと言ふんなら、一旦家に帰つて、両親とも相談して出直して来るがい

い。」

納得したのかしないのか、仙子は涙を拭ひながら、区役所へ出頭する時間が迫つたので、令状を懐ろに出かけて行つた。不安のままに私が待つてゐると、妹はおひる過ぎになつて帰つて来た。

「どうだつた？　挺身隊に行くことにしたのか。」

「家事担当者だつて言つたわ。」と一言言つたきり、仙子は浮かぬ顔をしてゐた。

「それで許してくれたのか。」

「嫂さんの病気は本当かと念を押したわ。」

「それで許してくれたんだね。」

「名簿に免除の印をつけてるやうだつたわ。」

と仙子は面倒臭さうに答へ、私が生米で粥を焚いてゐるのを見ると、

「御飯を入れると、早く出来るのに。」

と、突慳貪に言つて、鍋の蓋を取つて見るのであつた。

また、去年の暮のことであつた。丁度、空襲が激化して、近くの工場に、B29が頻々として爆弾を投下する頃であつた。警報が鳴る度に、仙子は押入に籠つて慄へてゐた。警報が解除になつて、押入から出て来ると、仙子はまつ蒼になつて、生きた人間の顔色はしてゐなかつた。

「わたし、怖くて、どうしても東京に居られなくなつたわ。兄さん、うちに帰らうよ。」と、仙子はその度に、神経衰弱に罹つたやうに脅えながら、繰り返すのであつた。

「さうだね、僕も怖いには怖いんだが、まだ東京に居て文学の仕事をすることに未練を感ずるんでね。」

「もう、文学だ何んだつて言つて居る時ぢやないと思ふわ。」と仙子は突つ掛かるやうに言つた。

「さうか。」と私はむつとして答へた。「あんたがさう思ふなら、勝手にさう思ふがいいや。僕はさうは思はないんだから。」

「でも、うちに帰つたつて、作品を書くぐらゐ出来ないことはないでせう。」と仙子は言葉を和らげて言つた。

「そりや、出来ないことはないさ。」

「ぢやア、田舎に帰つて書くやうにすればいいぢやないの。」

私はしつこいと思つたので、突つ刎ねるやうに言つた。

「それほど帰りたけりや、あんただけ帰れ。そんなに怖くて、よく工場へ挺身隊に行くなんて言へたもんだつたね。挺身隊に行つてゐたら、工場が直接爆撃目標になつて、今頃は生きてゐたかどうか知れたものではないんだぞ。」

仙子は返す言葉もなく黙り込んでしまつた。それを見ると私は、少し言ひ過ぎたかなと思ひながら、言葉を穏かにして、説き聞かすやうに言つた。

「僕の仕事は、田舎に居たつてどこに居たつて、出来なくはないが、僕の経験では、東京を離れると、どうも駄目になるんだ。田舎には、刺戟

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com